



## 世界の学問を日本に広める

# 高野長英

高野長英は、医師・蘭学者（オランダ語の書物で医学・天文学などの研究をした人）としても有名で、幕末の日本の社会や外交をよくしようと努力した人である。

一八〇四年（文化元年）、高野長英は水沢で生まれた、小さいころの名は悦三郎と呼ばれた。十歳を過ぎた頃、興田村（今は一関市東山町）という所で、おじいさんの元端と一緒に暮らすようになる。おじいさんは医者の仕事しながら村の子どもたちを集めて勉強を教えていたが、やがておじいさんに代わってしばしば勉強を教えることもあった。そして、十五歳になったときに元服（大人になったしるし）し、名をきょう齋と改めた。

一八一九年（文政二年）におじいさんが亡くなると、いったん水沢に帰るが、兄の医学に対する学び方をみて、より一層向学心を書き立てられ江戸遊学の思いを強くした。

一八二〇年（文政三年）長英が十七歳の時、兄とともに医者を目指し江戸へ行く。江戸に着いたきょう齋は、杉田玄白塾に通って勉強を始める。その後、塾を吉田長叔塾にかえ蘭学（オランダの学問）や医者になるために、治療と薬物研究をする。そして、一八二二年（文政五年）九月には、長淑先生に言いつけられて、江戸から栃木県の日光、茨城県の筑波山を回り、病氣治療に使う薬草を集めている。その努力が認められ、「塾の吉田先生から、医人として成長したので、名前をきょう齋から長英に改めて呼ばれるようになった。」ことが、父あての手紙から知ることができる。

一八二三年（文政六年）一緒に江戸へ出た兄が病氣になり、長英は一生懸命看病しながら勉強に努めていたが、この年の五月二十日亡くなる。長英は、亡き兄の遺骨遺品を届けながら、学費を送り続けてくれた父の病氣も心配し、十一月中旬に水沢の大畑小路の我が家に帰る。しかし、病氣で寝ていた父は、学業半ばで帰った長英に「本当の長英なら今頃は江戸で盛んに勉強しているはず」と言い、会おうとはしなかった。三日間水沢に泊まったが、父の診察もできないまま江戸へ帰るのである。

江戸に戻ると長英は、町医者を開業しながら吉田塾に通い勉強を続ける。ところが、仕事を世話した知人が金銭問題を起こし、その借金を長英が支払うことになり、よその家にやとわれて働き、借金

を返す。再び長英は、吉田塾に通い勉強に励むと同時に病氣の人を診察してお金を得るが、その生活は苦しかった。

長英が二十二歳の一八二五年（文永八年）親友に勧められ、偶然のチャンスで長崎に遊学をする。長崎ではオランダ人のシーボルトという先生に出会い、医学のほかにも農業や天文学などの科学、歴史や政治のことなど、世界に目を向けて、たくさんのことを学ぶ。翌年長英はシーボルトより「ドクトル」の免状を得る。そして、シーボルトにまかされて『養生録』全三冊を日本語に翻訳する仕事をする。

二十五歳のとき父が亡くなった知らせを受ける。長英は水沢に帰ることにした。長崎を後に熊本・福岡を回り広島へ向かう。一刻も早く水沢に帰ろうとする長英の心を引き止めるように、講義の依頼や難病治療の依頼が続くようになった。一方、長英の内心は、揺れ動いていた。「日本はこのままでもいいのか。国を開いて新しい国になる必要があるはしまいか。」迷いの末、長英は江戸に留まり日本をよくするために力を尽くすことを決意した。

江戸に戻ると長英は、麹町に塾を開き、病人を診察して治療したり、書物や学問上の考えを説明して教えたりした。また、オランダ語を日本語に翻訳する仕事を始める。

その頃、幕府は、世界の国々を寄せ付けない「鎖国」をしていた。三十歳の長英は、進んでいるヨーロッパやアメリカの学問文化を日本に取り入れるために「尚齒会」をつくり、数十人の仲間と話し合いを重ねている。一八三六年（天保七年）長英三十三歳の時、夏でも寒くて稲は実らず、麦も稗も不作で食べ物がなく、たくさんの人が餓死した。長英は天候が不順でもよく育つ早ソバやじゃがいもの種類・性質・効用・その栽培・調理法にいたるまでをくわしく本『救荒二物考』に表して植えることをすすめている。

また、一八三八年（天保九年）には鎖国を続ける江戸幕府の役人に対して、鎖国は良くないことであることを分からせようと「夢物語」を書く。内容は、イギリス人のモリソンが、嵐で難破した漁民を助け送り届けるために日本に来たことから、イギリスの国の様子を語り、万一にも幕府がその船を打ち払えば、イギリスの恨みをかき、取り返しのつかないことになるだろうとし、おだやかに話し合えば上陸させ漁民を受け取り、報償を与えべきこと、日本の鎖国が間違っていること、を教えようとして、書いたものであった。しかし、意外にもこれが幕府を批判したとして長英たちと考えを同じくする蘭学者（オランダの学問の研究を仕事としている人）たちに反感をもっていた役人によって長英は裁判にかけられる。そして、「夢物語」

は罪を決定する証拠にされ、直ぐに幕府より奉行所（今の裁判所）に出向くよう命令が出される。

一八三九年（天保十年）長英は北町奉行所に自首し、翌日 伝馬町 牢屋へ一生閉じ込められる命令をうける。長英は牢屋の中で「鳥のなくこえ」を書いて無実の罪を訴えているが認められない。

一八四四年（弘化元年）牢屋火災があり牢屋に入っている人は解放され、三日以内に戻れば罪が軽くなったが、長英は帰らなかった。全国逃亡を続けながら、長英は名前を変えたり顔を焼いたりしながら、日本の将来のことを考えて、再び本を書いたり、お医者さんとして活動を続ける。けれども幕府の役人に見つけられ、一八五〇年（嘉永三年）四十七歳で亡くなる。その後、新しい国づくりの基礎になる働きをしたということで一八九八年（明治三十一年）明治天皇より「正四位」を授けられ復権している。長英の活動の正しさが証明されたことになる。

\*高野長英についてもっと詳しく勉強したい人は、水沢区にある高野長英記念館や高野長英誕生の地（水沢区吉小路）を訪ねてみてください。

#### \*参考文献

『医人 高野長英』

岩淵憲次郎著

『岩手の先人一〇〇人』

岩手日報社

『奥州おもしろ学—ジュニア・テキスト』

特定非営利活動法人奥州おもしろ学



高野長英の肖像画（水沢区）